

古墳の葬礼と楯伏舞

福岡澄男（元財大阪府文化財センター理事）

『日本書紀』は天武天皇朱鳥元年(686)9月9日に、病気の床にあった天皇の死を記す。11日に初めて発哭、殯宮を南庭に起て、24日には南庭に殯す。とある。続いて27日には諸の僧尼が殯庭に発哭した後、多くの人物がそれぞれの職務に関わる内容にもとづき、誄を行ったことが記される。これ以降、持統天皇2年(688)11月まで2年2ヶ月余りにわたって、同様の内容がくりかえされたのである。この一連の行事を主導したのは、天武天皇の死と同時に称制した、持統天皇であったに違いない。

記事にみられる誄は、礼制の受容を意図したものと考えられるが、『礼記』曾子問第七にいう、「賤不_レ誄_レ貴、幼不_レ誄_レ長、礼也。唯天子、称_レ天以誄_レ之。諸侯相誄、非_レ礼也。」との誄の本来からは変容がはなはだしい。しかし、持統天皇元年正月の、布勢御主人による誄の後と、同年3月の丹比真人麻呂の誄および、同2年11月11日に当摩智徳が行った誄の後には、「礼也」という、『書紀』筆者の評価を一言加えて、他と区別しているのが注意される。『礼記』をよく承知している人物ならではの評価である。また、たびたび僧尼による発哭が記されているのは、葬送儀礼に仏教を取りこもうとしたことの現われに違いない。

そして殯の最終段階、持統天皇2年11月4日には、皇太子の慟哭が行われた後、楯節舞が奏されている。この後、11日の儀式を経て、同日に天武天皇は大内陵に葬られたのである。天武天皇の葬礼記事には、朱鳥元年9月30日種種の歌舞を奏るとみえ、持統天皇元年正月にも楽官、楽奏でとあって、楯節舞以外にも歌舞が奏されたことがわかる。

楯節舞については、これまで僅かな文献史料をもとに、林屋辰三郎、上田正昭、西郷信綱氏など、もっぱら歴史学や古典学の研究者によって論じられてきており、考古学の分野で楯節舞について論及されたことは、未だかつてないと思う。しかし古墳で行われた葬礼を検討すると、楯節舞の源流が古墳時代前期の4世紀代にあることがみえてくるように思われる。以上のことから、天武天皇の葬礼をとおして、飛鳥時代の葬礼の本質が、伝統的儀礼と、礼制や仏教を取りこむ革新的儀礼の融合にあったと考えられるのである。

本日の発表では、

1. 林屋辰三郎、上田正昭、西郷信綱氏らの研究をふりかえる。
2. 発掘調査によって明らかになった古墳の葬礼のうち、楯節舞の源流に関わると考える部分の検討。
を行いたい。

なお楯節舞は楯伏舞と表記する別史料もあり、「節」よりも「伏」の文字の方が所作の内容を表現するのにふさわしいと考えるので、本発表要旨の標題には「楯伏舞」を使用した。

① 天武天皇 朱鳥元年九月

九月の戊戌の朔、辛丑に、親王より以下諸臣に連るまでに、悉く川原寺に集ひて、天皇の病の爲に、誓ひ願ふと云云。丙午に、天皇の病、遂に差えずして、正宮に崩りましぬ。戊申に、始めて發哭る。則ち殯宮を南庭に起つ。辛酉に、南庭に殯す。即ち發哀る。是の時に當りて、大津皇子、皇太子を誅反けむとす。甲子の平旦に、諸の僧尼、殯庭に發哭りて乃ち退でぬ。是の日に、駭めて發進りて即ち誅る。第一に大海宿禰、壬生の事を誅す。次に淨大肆伊勢王、諸王の事を誅す。次に直大參禰大養宿禰大伴、總べて宮内の事を誅す。次に淨廣肆河内王、左右大舍人の事を誅す。次に直大參當麻呂、眞人國見、左右兵衛の事を誅す。次に直大肆采女朝臣三羅、内命婦の事を誅す。次に直廣肆紀朝臣眞人、膳職の事を誅す。乙丑に、諸の僧尼亦殯庭に哭る。是の日に、直大參布勢朝臣御主人、大政官の事を誅す。次に直廣參石上朝臣麻呂、法官の事を誅す。次に直大肆大三輪朝臣高市麻呂、理官の事を誅す。次に直廣參大伴宿禰安麻呂、大藏の事を誅す。次に直大肆藤原朝臣大嶋、兵政官の事を誅す。丙寅に、僧尼亦發哀る。是の日に、直廣肆阿倍久努朝臣麻呂、刑官の事を誅す。次に直廣肆紀朝臣弓張、民官の事を誅す。次に直廣肆穗積朝臣眞人、諸國司の事を誅す。次に大隅・阿多の隼人、及び倭・河内の馬飼部造、各誅す。丁卯に、僧尼、發哀る。是の日に、百濟王良賈、百濟王善光に代りて誅す。次に國國の造等、參赴るに隨ひて、各誅す。仍りて種種の歌儔を奏る。

持統天皇 稱制前紀

1 朱鳥元年の九月の戊戌の朔、丙午に、天澤中原瀛真人天皇崩りましぬ。皇后、臨朝稱制す。
2 皇太后、臨朝稱制す。
3 十二月の丁卯の朔、乙酉に、天澤中原瀛真人天皇の奉爲に、無遮大會を五つの寺、大官・飛鳥・川原・小墾田・豐浦・坂田に設く。壬辰に、京師の孤獨高年に布帛賜ふこと、各差有り。
4 閏十二月に、筑紫大宰、三つの國高麗・百濟・新羅の百姓男女、并て僧尼六十二人を獻れり。
(中略)

(中略)

持統天皇 稱制前紀・元年正月一七月

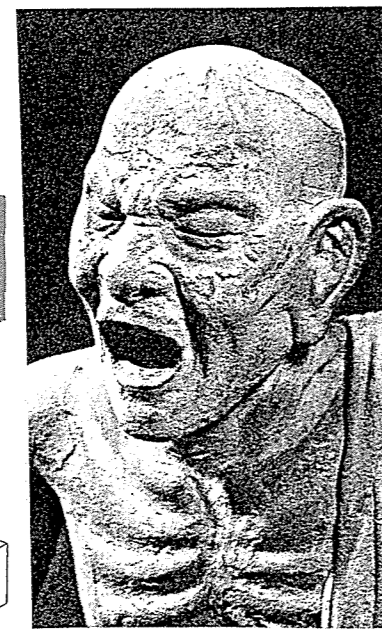
8 元年の春正月の丙寅の朔に、皇太子、公卿・百寮人等を率て、殯宮に過て、勸哭る。納言布勢朝臣御主人、誅す。禮なり。誅畢へて衆庶發哀る。次に梵衆發哀る。是に、奉膳紀朝臣眞人等、奠奉る。奠畢へて、膳部・采女等發哀る。樂官、樂奏る。庚午に、皇太子、公卿・百寮人等を率て、殯宮に過て、勸哭る。梵衆、隨ひて發哀る。庚辰に、京師の、年八十以上、及び篤癯、貧くして自ら存ふこと能はぬ者に、絶綿賜ふこと、各差有り。甲申に、直廣肆田中朝臣法麻呂と追大貳守君苅田等とをして、新羅に使用して、天皇の喪を赴げしむ。
15 三月の乙丑の朔、己卯に、投化ける高麗五十六人を以て、常陸國に居らしむ。田賦ひ粟受ひて、生業に安からしむ。甲申に、花綬を以て、殯宮に進る。此を御陰と曰す。是の日に、丹比眞人麻呂、誅す。禮なり。丙戌に、投化ける新羅十四人を以て、下毛野國に居らしむ。田賦ひ粟受ひて、生業に安からしむ。
20 夏四月の甲午の朔、癸卯に、筑紫大宰、投化ける新羅の僧尼及び百姓の男女二十二人を獻る。武藏國に居らしむ。田賦ひ粟受ひて、生業を安からしむ。五月の甲子の朔、乙酉に、皇太子、公卿・百寮人等を率て、殯宮に過て、勸哭る。是に、隼人の大隅・阿多の魁帥、各己が衆を領りて、互に進みて誅す。
24 六月の癸巳の朔、庚申に、罪人を赦す。
27 秋七月の癸亥の朔、甲子に、詔して曰はく、「月そ負償者、乙酉年より以前の物は、利收ること莫。若し既に身を役へらば、利に役ふこと得され」とのたまふ。辛未に、隼人の大隅・阿多の魁帥等、三百三十七人に賞賜ふ。各差有り。

持統天皇 元年八月一二年二月

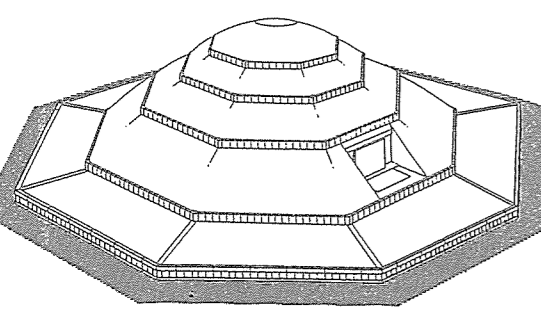
29 八月の壬辰の朔、丙申に、殯宮に嘗る。此を御青飯と曰ふ。丁酉に、京城の耆老男女、皆臨みて橋の西に勸哭る。己未に、天皇、直大肆藤原朝臣大嶋・直大肆黃書連大伴をして、三百の龍象しき大徳等を飛鳥寺に請集へて、袈裟を奉施りたまふ。人別に一領。曰はく、「此は天澤中原瀛真人天皇の御服を以

て、縫ひ作る所なり」とのたまふ。詔の詞酸く割し。具に陳ぶべからず。九月の壬戌の朔、庚午に、國忌の齋を京師の諸寺に設く。辛未に、殯宮に設齋す。甲申に、新羅、王子金霜林・級漢金薩募及び級漢金仁述・大舍蘇陽信等を遣して、國政を奏請し、且調賦を獻る。學問僧智隆、附ひて至れり。筑紫大宰、便ち天皇の崩りますことを霜林等に告ぐ。即日、霜林等、皆喪服着て、東に向きて三たび拜みて、三たび發哭る。
38 冬十月の辛卯の朔、壬子に、皇太子、公卿・百寮人等并て諸の國司・國造及び百姓男女を率て、始めて大内院を築く。
41 十二月の辛卯の朔、庚子に、直廣參路眞人迹見を以て、新羅に遣たまふ。勅使とす。是年、大歲丁亥。
42 二年の春正月の庚申の朔に、皇太子、公卿・百寮人等を率て、殯宮に過て、勸哭る。辛酉に、梵衆、殯宮に發哀る。丁卯に、無遮大會を藥師寺に設く。壬午に、天皇の崩りますことを以て、新羅の金霜林等に奉宣ふ。金霜林等、乃ち三たび發哭る。
46 二月の庚寅の朔、辛卯に、大宰、新羅の調賦、金・銀・絹・布・皮・銅・鐵の類十餘物、并て別に獻る所の佛像・種種の彩絹・鳥・馬の類十餘種、及び霜林が獻れる金・銀・彩色・種種の珍異しき物、并て八十餘物獻る。己亥に、霜林等に筑紫館に饗たまふ。物賜ふこと各差有り。乙巳に、詔して曰はく、「今より以後、國忌の日に取らむ毎に、要す齋すべし」とのたまふ。戊午に、霜林等罷り歸りぬ。
51 三月の己未の朔、己卯に、花綬を以て、殯宮に進る。藤原朝臣大嶋、誅す。
52 五月の戊午の朔、乙丑に、百濟の敬須德那利を以て、甲斐國に移す。
56 六月の戊子の朔、戊戌に、詔したまはく、「天下に令して、繫囚の極刑は、本罪を一等減せ。輕繫は皆赦し除めよ。其れ天下をして、皆今年の調賦を半入れしめよ」とのたまふ。
58 秋七月の丁巳の朔、丁卯に、大きに等す。早なればなり。丙子に、百濟の沙門道藏を命じて請雨す。不崇朝に、遍く天下に雨ふる。
61 八月の丁亥の朔、丙申に、殯宮に嘗りて勸哭る。是に、大伴宿禰安麻呂誅す。丁酉に、淨大肆伊勢王を命じて、葬儀を奉宣はしむ。辛亥に、耽羅の王、佐平加羅を遣して、來きて方物獻る。
63 九月の丙辰の朔、戊寅に、耽羅の佐平加羅等に筑紫館に饗たまふ。物賜ふこと各差有り。
64 冬十一月の乙卯の朔、戊午に、皇太子、公卿・百寮人等と諸蕃の賓客とを率て、殯宮に過て、勸哭る。是に、奠奉りて、桶節舞奏る。諸臣各己が先祖等の仕へまつれる狀を擧げて、遞に進みて誅す。己未に、蝦夷百九十餘人、調賦を負荷ひて誅す。乙丑に、布勢朝臣御主人・大伴宿禰御行、遞に進みて誅す。直廣肆當摩眞人智徳、皇祖等の臘檀の次第を誅奉る。禮なり。古には日嗣と云す。畢りて大内院に葬りたまふ。

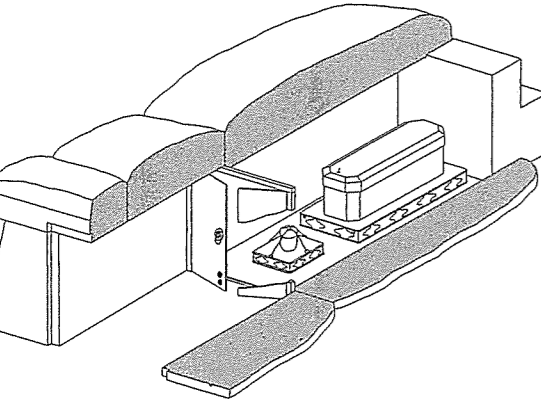
71 日本古典文学大系 日本書紀下 岩波書店 一九六五年
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注
日本古典文学大系 日本書紀下 岩波書店 一九六五年



長廣敏雄・坂本万七・辻本米三郎 法隆寺五重塔の塑像 岩波書店 1974年



天武・持統陵墳丘復元図



天武・持統陵墓室復元図

③ 猪熊兼勝、飛鳥の古墳を語る、吉川弘館 1994年